



令和7年度福岡市埋蔵文化財センター考古学講座

倭国と古代東アジア 交流と諸国興亡の時代

第1回 令和7年7月12日(土)

「弥生時代抗争の背景の変化と高地性集落の東方波及
—その多元的性格と役割の解明をめぐる—」

(公財)古代学協会客員研究員 森岡 秀人 氏



福岡市埋蔵文化財センター

〒812-0881 福岡市博多区井相田2-1-94 TEL: 092-571-2921 FAX: 092-571-2825
電子メール: maibun-c.EPB@city.fukuoka.lg.jp

上半の遺物写真は、公共누리第1タイプで公開された大韓民国e-뮤지엄 <http://www.emuseum.go.kr/main> から取得した画像を加工し配置した。所蔵品番号は左から①156(慶州市出土黄金飾心葉型耳飾)、②1289(慶州市出土金製指輪)、③56093(金器部出土金製指輪)、④7487(ペノリ3号出土青銅)、⑤7489(ペノリ3号出土青銅)、⑥23(ムリョン王陵出土鉄製指輪)。下半の遺物写真はCoBase(<https://colbase.nich.go.jp/>)と、世界遺産「神宮寺」宗廟・神ノ島と関連遺産群デジタル・アーカイブ(<https://www.munakata-archives.asia/frmDefault.aspx>)から取得した画像、福岡市埋蔵文化財センター所蔵画像を加工し配置した。右上から江田船山古墳出土鉄製指輪、井ノ島出土金製指輪、江田船山古墳出土青銅指輪、老司古墳出土青銅、江田船山古墳出土金製耳飾、今南大塚出土青銅指輪、香泉中央は福岡市明花洞古墳。

〔第1回〕 令和7年7月12日（土）13時15分～15時

会場：福岡市博物館1階講堂

弥生時代抗争の背景と高地性集落の東方波及——その多元的性格と役割の解明をめぐる

森 岡 秀 人（公財 古代学協会 客員研究員）

◇講演要旨◇

□古代の東アジア世界において、倭国の形成へと向かう日本列島は、何段階にもわたる紆余曲折のステージを経て、巨大な前方後円墳を築造し、ヤマト王権が古墳時代社会の枢要部の舵取りを担う姿として、地域への懐柔、隷属、同盟などの支配関係を進展させる。その前段となる弥生時代の初期農耕社会は、各地で個性豊かな土器を作り、地域性の強い墓制を営み、集落間の関係も社会の発達階梯も大きな格差を生んでおり、教科書で説かれるような統一要素の強い「弥生文化」の地理的範囲、空間はなかった。特徴的な要件として挙げられた環濠集落、水田稲作と小区画水田、金属器の登場（青銅器・鉄器）、弥生人などの構成要素も一斉に揃うことはなく、段階的であり、さらにその存否にも著しい違いが認められるのが実態だからである。ただし、日本史としての時代区分の「弥生時代」は便宜上必要であり、早期や前期・中期・後期・終末期といった時期区分も先進地の北部九州を基軸として横にらみしながら、土器編年上の同時性や西からの少なくないずれを考える必要がある。

□さて、「高地性集落」とはいったい何か。私たち人類の生活史数百万年は、遊動的生活がその大部分を占めている。活動の根拠地とも言える定住集落を営み、住居を機能や目的に応じてどこに建てるのかといった選地に日々神経を尖らせ始めたのは、この2万年ぐらいのことである。研究史上、縄文時代には高所での居住も注目されていたが、「高地性集落」という専門用語が広く使用され、学校の教科書でも恒常的に登場するようになったのは、やはり弥生時代の集落研究によるところが大きい。その学史的取っ掛かりは、蒔田鎗次郎のあたりまで遡るが、1932年の森本六爾の指摘、中山平次郎・柴田常恵・高橋健自・山内清男・八幡一郎・藤森栄一なども遺跡立地を前提に生業活動に関心を寄せている。今日では弥生社会の発展形態や陸海両域での交通路の研究のみならず、前期古墳の立地スタイルなどとも不可分な問題軸を立てている現状があり、研究の視野、裾野はその方法の進化とともに、飛躍的に拡大している。この福岡市にも新しい概念に見合う高地性の遺跡が要地に存在し、あらためて注目している。

□厚い研究の流れを回顧すると、その大きな画期が1970年代にあることは疑う余地がない。1960年代の典型的な高地性集落の発掘調査が行われ、その報告書の刊行を受け（香川県紫雲山遺跡や兵庫県会下山遺跡など）、武器を用

いる抗争の性格論の議論が持て囃された。それは戦後、山口県島田川流域における山口大学の小野忠熙の目的意識を持った学術調査の実施と問題提起の数々を受けた論説が多いが、『魏書』東夷伝倭人条や『後漢書』倭伝にみえる「倭国乱」の記載との関係が一躍重視されるに至り、その機能や性格が大々的に論争となった。そうした時勢を受け、高地性集落に的を据えた総合的な研究で特筆されるのは、1972～1975 年にかけて実施された小野忠熙を研究代表者とする総合研究のプロジェクトであり、全国各地の名だたる研究者が 100 名以上関与していたものと思われる。当時、22 歳でその末席に加わり、地図作りの下仕事や弥生土器の広域編年の併行関係の検討、そして現地の実地踏査など、集落の研究には膨大なエネルギーと他地域の研究者との緊密な連携プレーが必須であることも体得したが、そのすべての作業がアナログで行われたものであった。爾来、これまで大規模で全国的な高地性集落の研究は試みられなかったが、個別研究は 1980 年代、1990 年代、そして 21 世紀に突入して各地で大きく進んでおり、その研究史の画期も段階を踏んでまとめられている。これらを通観するに、高地性集落の比高を重視しての 2 類型区分が重視され（都出比呂志の A タイプ・B タイプ、寺沢薫の I 類型・II 類型、石野博信の山稜性・丘陵性など）、小野も広義と狭義などの分類に意味を持たせてきたが、究極の存在目的が有効性のある眺望そのものであり、標高は無論のこと比高の高位のみを有力視しても問題解決には至らなかった。

■本日の講演の話題は、弥生時代の高地性集落の研究現状を踏まえ、その機能や性格付けはどのようになってきたのか（多様性の問題）、抗争のような歴史的背景がどのように動いているのか、変動の主動地域を問題とする。その際、中国王朝との対比を含め、暦年比定の大きな変革は重要な位置を占めており、とくに近畿の 3 世紀弥生後期説（1960 年代～1970 年代）の懷疑から、1980 年代中頃以降の近畿年代観の確立（後期 1 世紀初頭～2 世紀後半）により、各地の高地性集落の盛行時期にも大きなズレを与えた。複数の中国史書などに記載されているいわゆる「倭国乱」期と重なりと目されてきた高地性集落の大半が紀元前社会の産物となり、紀元 1 世紀前葉から始まる後期高地性集落には、長距離交易に伴って入る先進文物（中国鏡・小形仿製鏡や鉄器類）が認められ、環壕を持ち集住性の高いものを含んでいる点は注目しておきたい。和泉の惣ヶ池遺跡では最近また古い弥生仿製鏡が発見されている。

■従来唱えられてきた南部域のヤマト王権を前提とした駆動が弥生後期にあったかと言えば、小林行雄・佐原真・田辺昭三・田中琢らの学説には大いに疑問がある。大和域は銅鐸や鉄器、玉類の数量はきわめて乏しく、大和川水域の活動体は高地性集落の様態にも違いをみせている。一方、近畿北部域には播磨灘⇒西摂津⇒淀川水域⇒山城南部⇒琵琶湖東南岸⇒美濃・尾張、湖北から越前・越中・越後への物流の連鎖が認められ、日本海経由の山陰・丹後

方面から北陸に向けての長距離輸送物の中に大陸・半島系のものが北上する。この内陸通過や海上のルートと関連して高地性集落が営まれている。比高の絶対値は低いが、交易ルートのアクセスに便ある地点が選定されている。

■最近 4 年間にわたって行われた学振科研（基盤研究 B）「弥生時代高地性集落の列島の再検証」（研究代表者：森岡秀人）は、ほぼ半世紀振りに取り組んだこの種集落の解明を目指した総合的研究の一つとして位置付けられる。かつて小野が大きな課題として演者に託されたさまざまな宿題があったが、一定限度解決の目途が立った弥生時代の共有年代軸の整合的な是正、弥生中期・後期土器編年細分の進捗、広域併行関係の巨視的な整理は長足の進歩をみせている。その結果、高地性集落の機能研究では、地域から発せられた概念規定の違いや機能の多面性を容認する方向をとりつつも、旧来主張してきたその波及現象に関しては、広域的にその連鎖的立地が一定の方向性を持っていることが確認された。その点を強調しておく、半世紀前の小野をチーフとした総合研究では、549 の数にのぼる対象遺跡が踏査カード集成され、九州南部から東北北部に及ぶ広い分布が示されたが、何かの有意性自体は掌握しづらい一面が存在した。2024 年 3 月に私が主宰したプロジェクトでは、450 余遺跡のデータを包括し、チームの宇佐美智之が全遺跡の位置情報（座標）を取得して分布図を新たに更新したが、4 つの分布図を比較しただけでも、研究の現在地としての傾向性を端的に読み取ることが可能である。例えば、瀬戸内海・大阪湾沿岸における分布の集中傾向はあまり変わらないものの、東北・北陸・山陰・九州中・南部では顕著な実数の変化が認められる。小野らのデータでは、有機的な存在になり得ていない地域が多いが、昨年実績の研究データでは、研究者の高地性集落の捉え方にも大きな変化が生じ、結果として私たちのグループによる集約的群棲地帯、連鎖的反応地域が判読でき、海上航路と絡む沿岸部に意味ある列状配列が認められた。さらに瀬戸内海を中心とする紀元前の遺跡に対し、大阪湾岸地域から淀川水系、琵琶湖西岸、北陸西部から東部一帯の地域にかけて、紀元 1 世紀から 3 世紀にかけて東進、北進する様相も具体的に把握できるようになり、以前示した「東方波及」の見通しは、抗争の目的に変化をみせつつも、一貫して東の世界とも繋がりを有することが明瞭となったと言えよう。

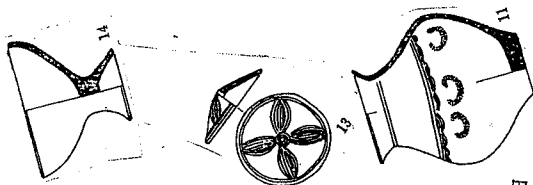
■半世紀にわたり私が踏査することのできた地域・遺跡は限りがあるものの、その動態には大きな意義を持ち始めているという実感を持つ。踏んだ地域は西は西北部九州から北陸東部、山形県近くに及んでおり、瀬戸内・大阪湾沿岸、近畿の南北の要所に留意しつつ、発掘調査が進展した北陸西部、四国東部や土佐にも及んだ。瀬戸内海地域では、柴田昌児の率いる科研グループと合同で瀬戸内海の島嶼部や沿岸、半島の高地性集落の位置を確認し、海上からの眺望ととりわけ紫雲出山遺跡山頂部からの観測者との相互視認状況確認を多くの考古学研究者を乗せた船か

ら行った。これは高地性集落研究史上初の試みと言え、弥生時代との諸条件は異なるものの、実りある実証的な観察結果を残すことができたのではないかと思う。

■地味な面では高地性集落の日常生活において、土器の生産や使用は低地の集落と比べ特別な事情があったと思われる。素材となる粘土が山地部に存在することを前提とする議論は危ないだろう。香川県紫雲出山遺跡や兵庫県会下山遺跡では、山頂部の調査や土器胎土分析により周辺の遺跡からその全部が山の上に運びこまれている様子が明らかにされた。毎日使うような容器が低所の集落や粘土採掘場に全面依存する可能性が高くなったのである。遠距離輸送が見込まれる外来土器が飛び火のごとく顕著に搬入されている現象も看過できない（生駒西麓産大型壺など）。銅鐸など大型青銅器の遠隔地埋納に高地性集落が関与した可能性をかつて指摘したが、移動系の大型壺に銅鐸を描く実例があり（摂津）、中期後半段階のルートの形成が想定される。

■お膝元の福岡市域にも要注意の遺跡があり、比高を度外視して、その眺望条件や周囲の景観・環境に留意すれば、カッコ付きの高地性集落として把握することも可能と考える。玄界灘沿岸は、当時の長距離貿易の起点であり、終着地ともなるが、西日本一帯から東日本に向けては一大中継地的な倭国内発信原であり、この地を経て瀬戸内ルートや日本海ルートで稀少財が遠隔地へともたらされている。まさに本講座の総合テーマとも絡まる話題が福岡市の埋蔵文化財調査の努力により出土しているのであり、地下からのメッセージにしばし耳を傾けたい。近畿に流入してくる威信財的な資料の多くは、福岡を素通りしたようなものでないとする立場で推考している。とくに博多湾の周辺には港津的性格の遺跡を包括して、西区姪浜遺跡、早良区西新町遺跡、西区今宿五郎江・大塚遺跡群、博多区博多遺跡群、長距離交易の背景というべき交易都市的機能を発揮する拠点の遺跡としての博多区比恵・那珂遺跡群が展開しており、東アジアと原生倭国の市場を結ぶ中枢機能を果たしたはずである。福岡平野には他に通運などのアクセスに対して管掌的機能の有望な準高地性の遺跡がみられ、注目される。対内的な性格であろうが、東区三苦永浦遺跡 J 地区（眺望条件良好）、博多区席田大谷遺跡第 1・2 次地点（遠望観良い）、博多区席田中尾遺跡（眺望の良い第 1 次調査地点）、城南区飯倉 G 遺跡（眺望良好の第 4・5 地点、有環濠）、西区野方中原遺跡などにも触れる。巷では、「高地性集落」使用廃止論なども横行している。そうした背景を意識しつつもこれらも仲間を含めるといった柔軟性が不可欠であろう。若干のまとめを行い、講演を閉じることとする。

※紙幅の関係で、膨大な引用・参考文献などを割愛しましたが、ご寛恕ください。ご清聴に感謝いたします。またの来福を楽しみに。



田 辺 昭 三
佐 原 真

大和政権は、突然に出現したのではない。この自明の事実を前提として、弥生時代の畿内を問題にしたい。大和政権の成立については、国家権力をうたした諸条件の歴史的発展が、畿内という地域のなかで説明されなければならない。

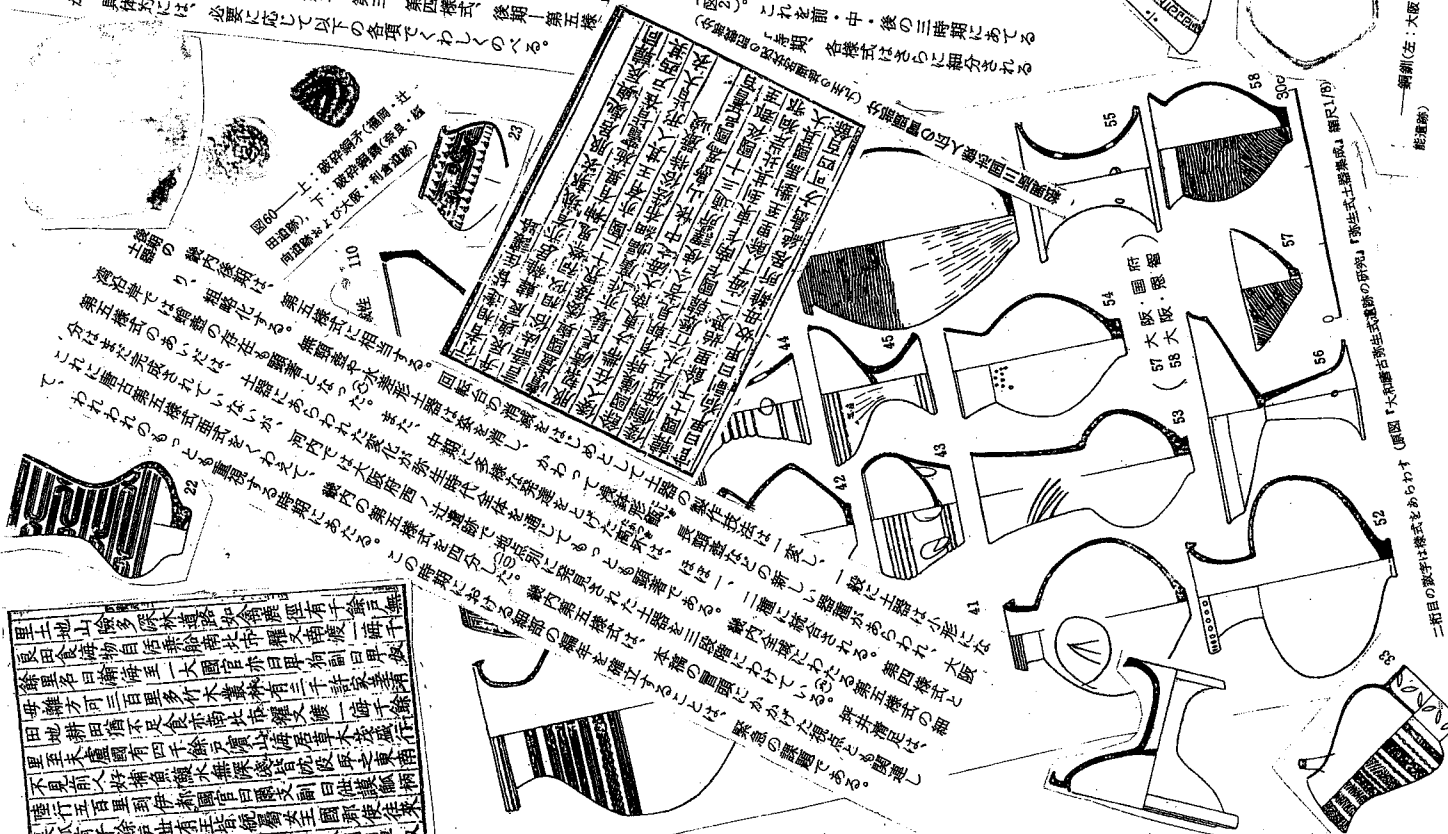
佐原 真三

田辺 昭三

一、时期区分と地域的特色

土器の分類は、形制や文様にあられたふくべの現象をとらえるだけでなく、土器製作の技法にもとづいたものがある。土器の分類は、形制や文様にあられたふくべの現象をとらえるだけでなく、土器製作の技法にもとづいたものがある。土器の分類は、形制や文様にあられたふくべの現象をとらえるだけでなく、土器製作の技法にもとづいたものがある。

と、前期—第一様式、中期—第二、第三、第四様式、後期—第五様式に区
分し、具体的には、必要に応じて以下の各項をくわしく定める。



—

一桁目の数字は様式をあらわす

河劍(左:大阪・巨摩庵寺遺跡, 右:兵庫・田

東京都千代田区6
山手3の6
株式會社
河出書房新社

1966

弥生時代

THE

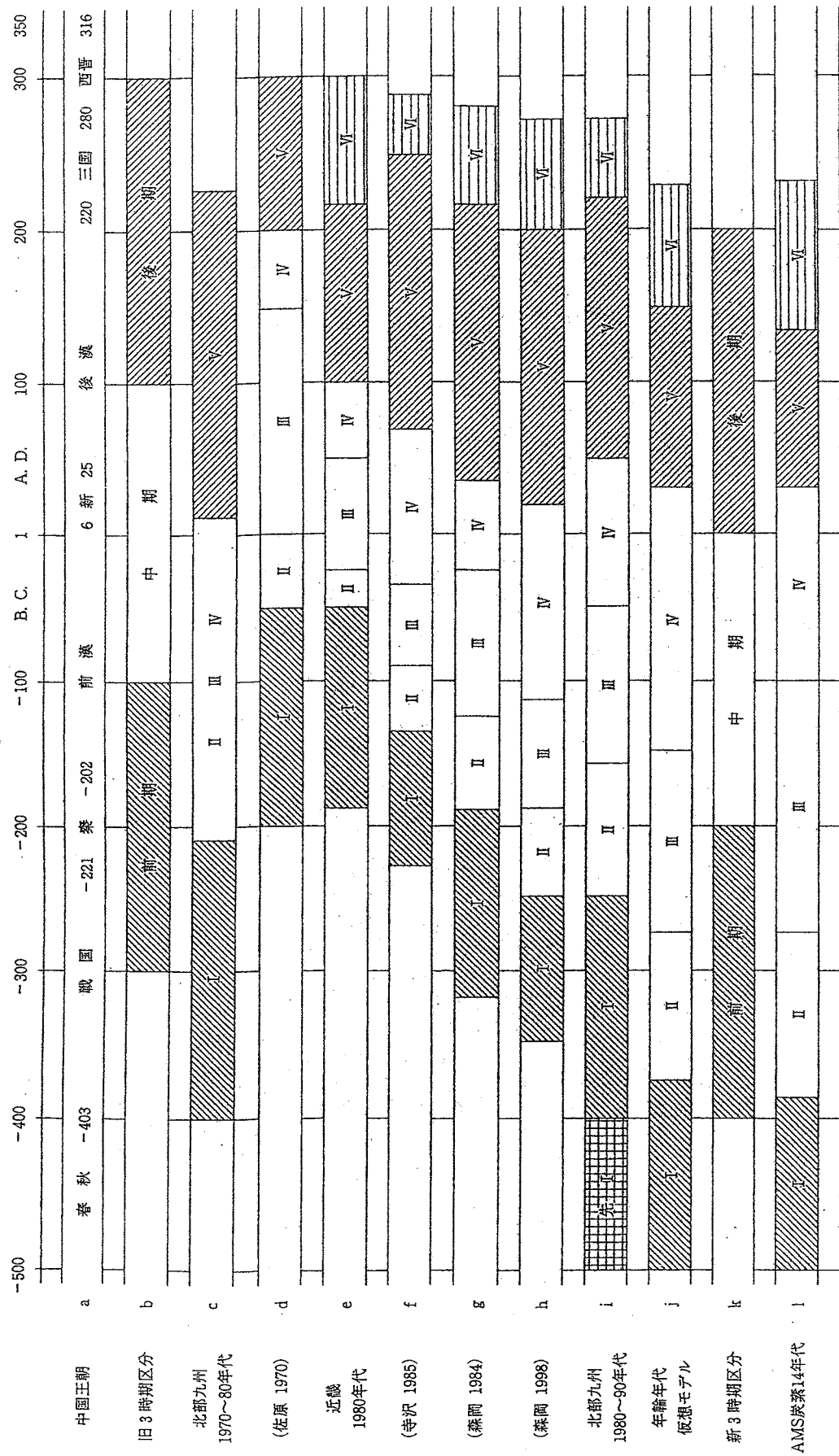
1991年1月30日 初版発行

11 年 1 月 30
¥ 980.

編者 久判 聚
發行 者 田
印刷 者 鐵
裝幀 者 誠
和河堀庫
島出

[illegible]

5



弥生時代年代表諸説の推移 (森岡 2003 原図一部改変)

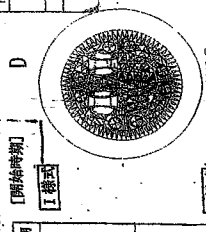


B 考古年代と科学年代の比較対照年表 (続前2005年から、一部加筆)

科学年代	考古年代	科学年代	考古年代	科学年代	考古年代
400	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
300	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
200	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
100	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
0	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)

科学年代	考古年代	科学年代	考古年代	科学年代	考古年代
400	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
300	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
200	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
100	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
0	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)

D



E

科学年代	考古年代	科学年代	考古年代	科学年代	考古年代
400	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
300	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
200	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
100	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
0	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)

F

科学年代	考古年代	科学年代	考古年代	科学年代	考古年代
400	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
300	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
200	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
100	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)
0	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)	長城式(新前期)

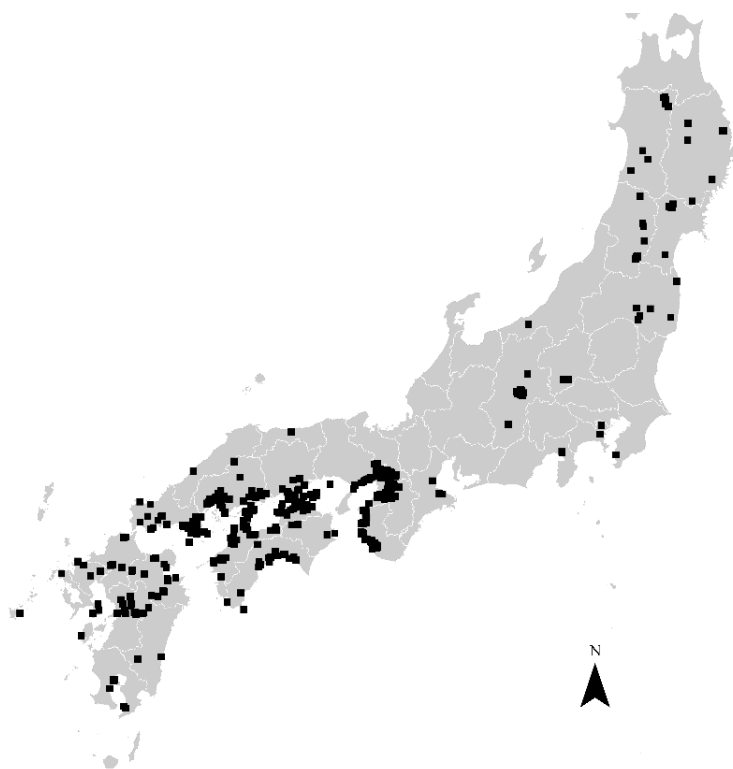


図1『高地性集落跡の研究（資料編）』（1979年）による高地性集落分布（全時期）

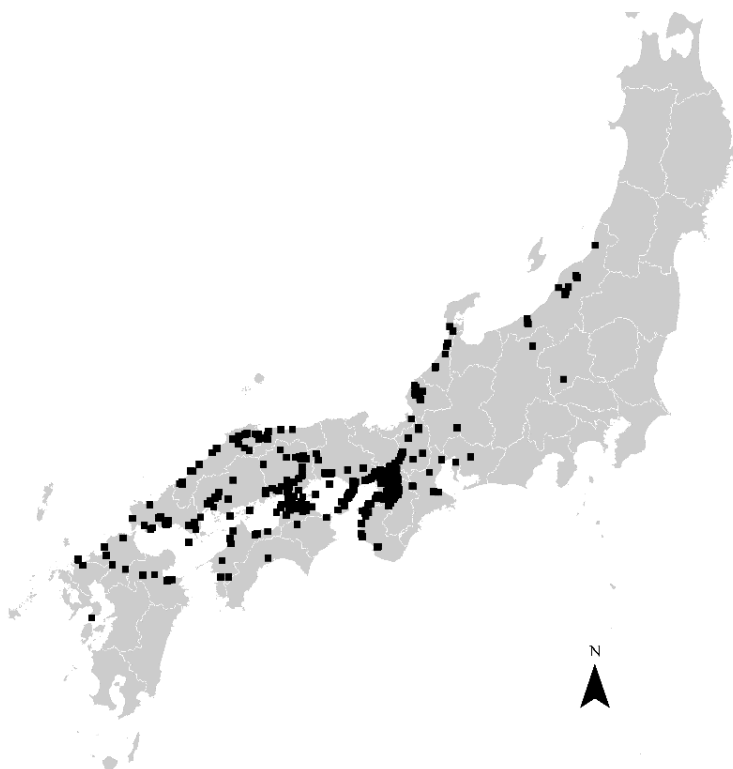


図2「弥生時代高地性集落の列島の再検証」（2024年）による高地性集落分布（全時期）

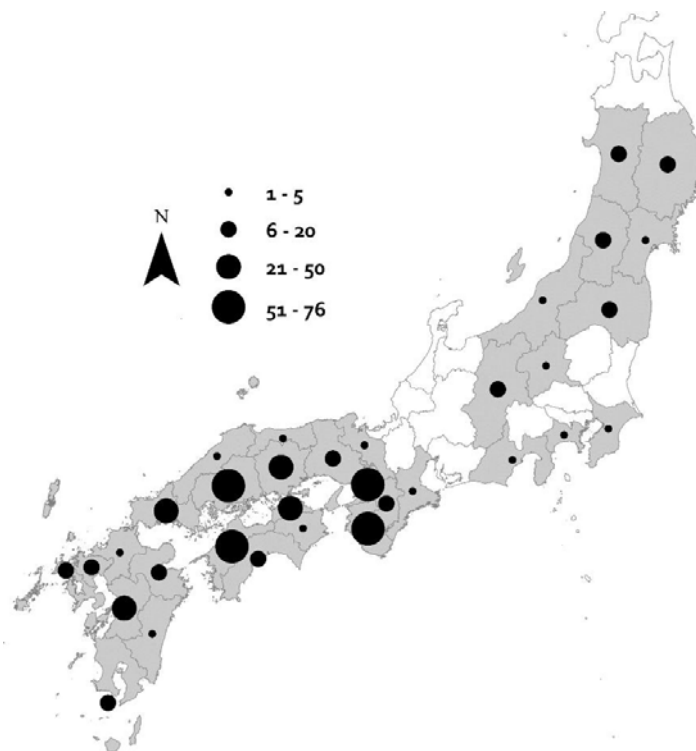


図3『高地性集落跡の研究（資料編）』（1979年）による都道府県別遺跡数（全時期）

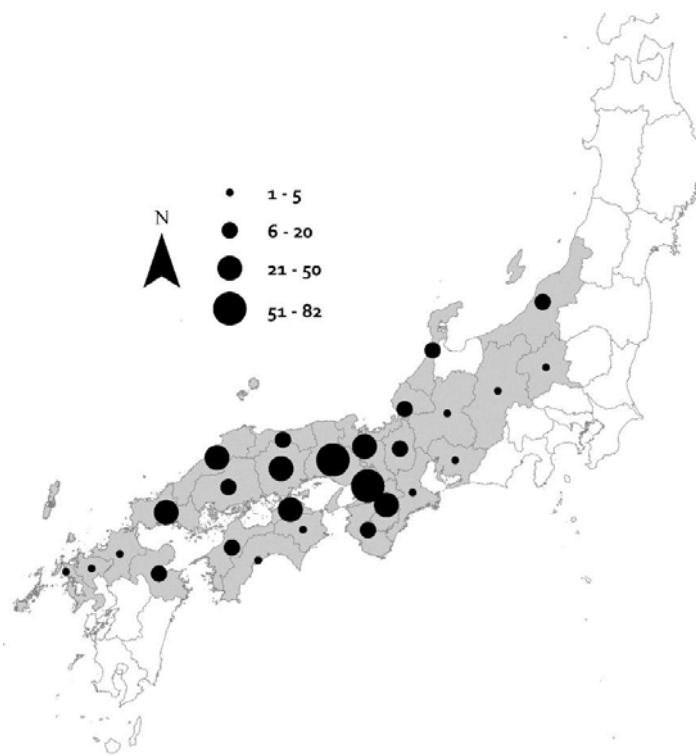
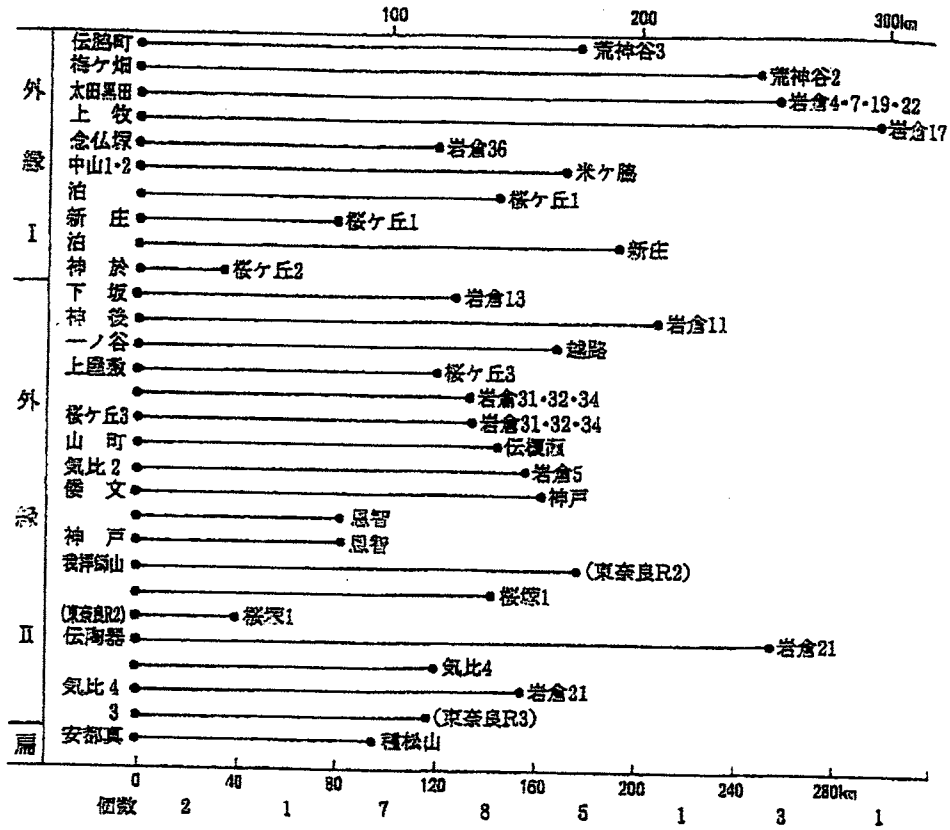


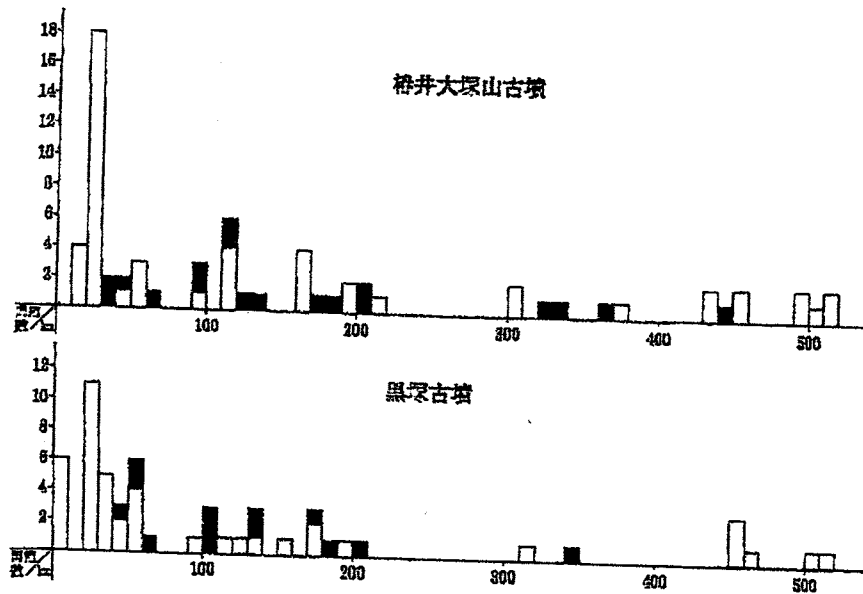
図4「弥生時代高地性集落の列島の再検証」（2024年）による都道府県別遺跡数（全時期）

(A)



同範銅鐸間の距離 (川西2008)

(B)



同範鏡間の距離一覧 (川西2008)

白：畿内および西方 黒：畿内より東方

(A)

表. 漢鏡と弥生青銅器の対比編年表

漢鏡	弥生年代	鉛同位体比	北部九州	山陰	北四国	近畿	東海
3 期後半	中期後葉	領域 A	中細形銅矛	中細形銅劍	平形銅劍	扁平鈕式銅鐸	
4 期前半	後期前葉		中広形銅矛			突線鈕 1 式銅鐸	
4 期後半		領域 a	広形銅矛			近畿式銅鐸	三遠式銅鐸
5 期前半	後期中葉						
5 期後半							

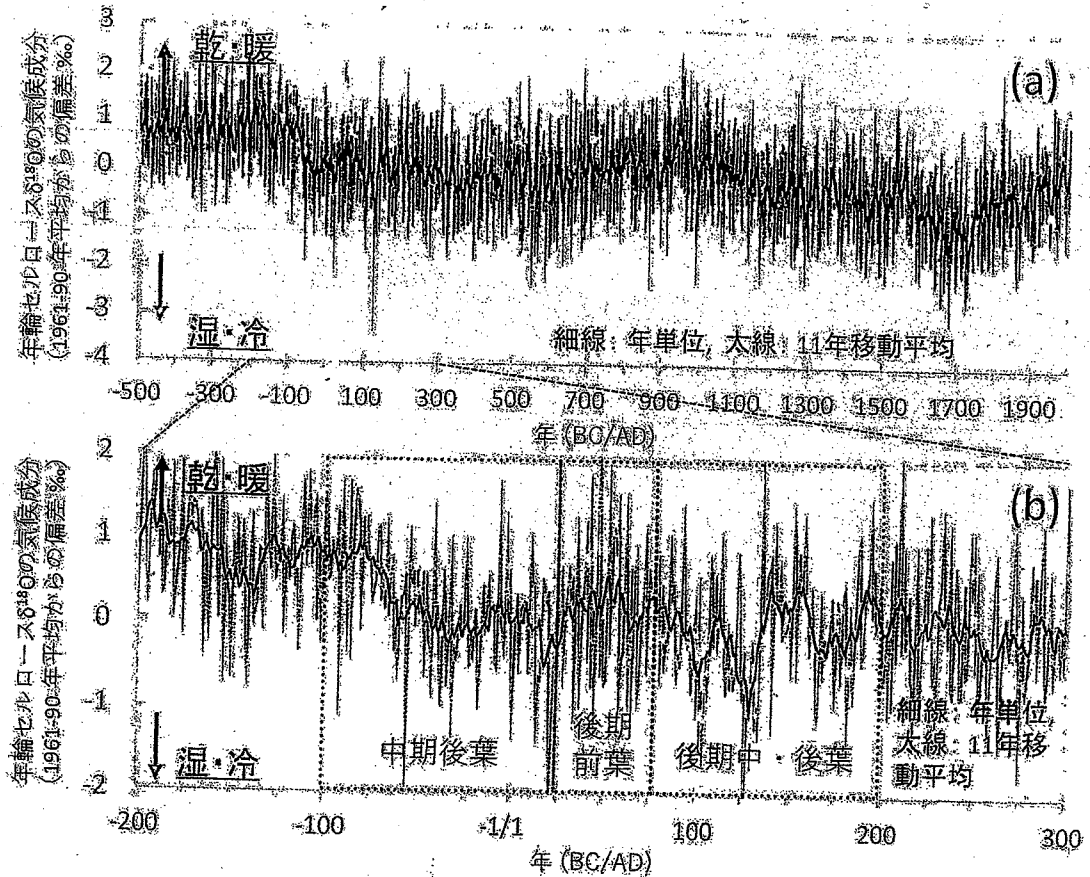
(B)

漢 鏡	弥生年代	鉛同位体比	北部九州	山 陰	北四国	近 畿	東 海
3 期後半	中期後葉 後期前葉	領域 A	中細形銅矛	中細形銅剣	平形銅剣	扁平鈕式銅鐸	
4 期前半			中広形銅矛			突線鈕 1 式銅鐸	
4 期後半		領域 a	広形銅矛			近畿式銅鐸	三遠式銅鐸
5 期前半	後期中葉						
5 期後半	後期後葉						
6 期	庄内式前期						

上段:岡村秀典 2024a より転載

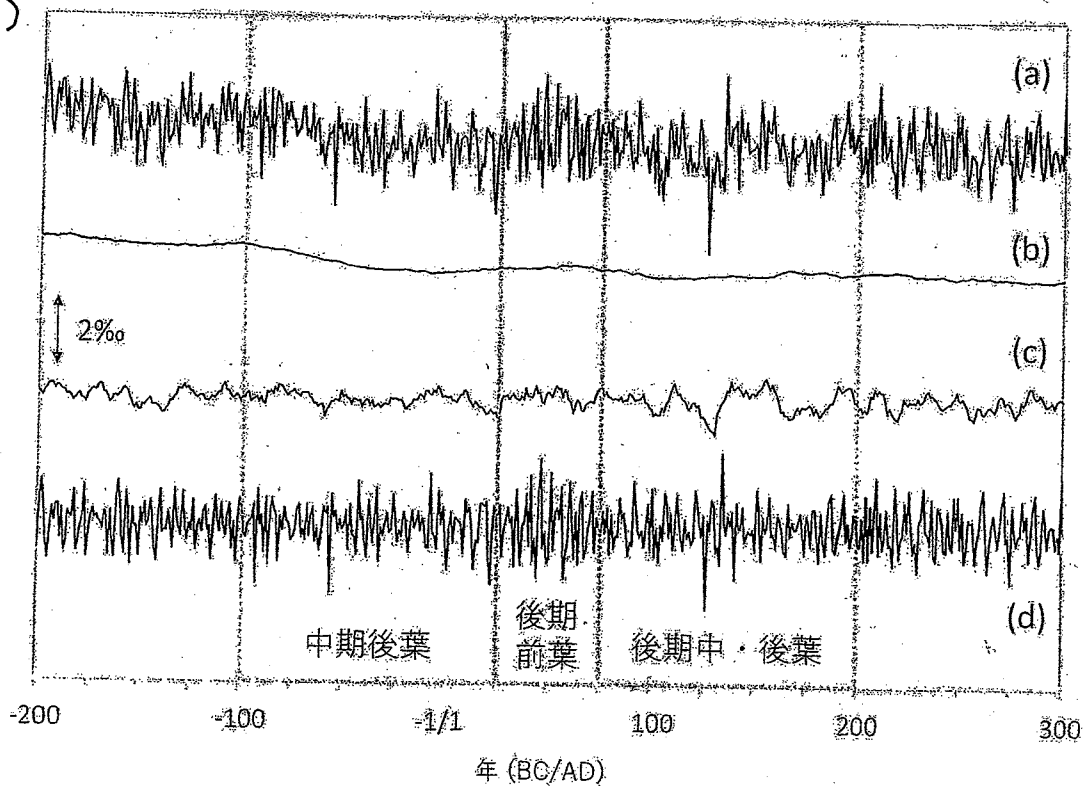
下段:岡村秀典 2024b より転載、一部表現を改変

(A)



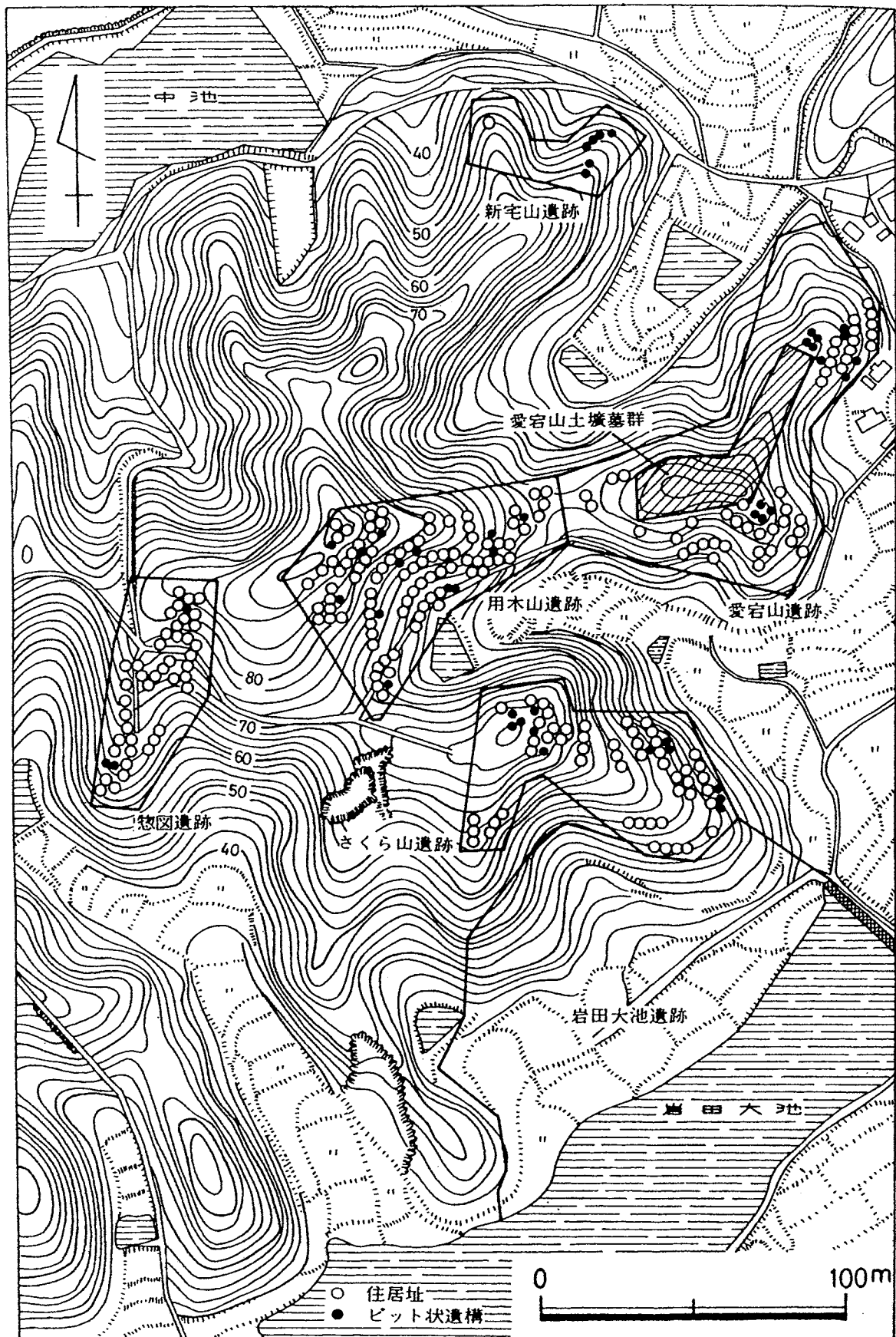
樹木年輪セルロースの酸素・水素同位体比から計算された中部日本の年輪酸素同位体比の気候学的成分の変動
a. 過去2500年間, b. 弥生中期から古墳前期

(B)

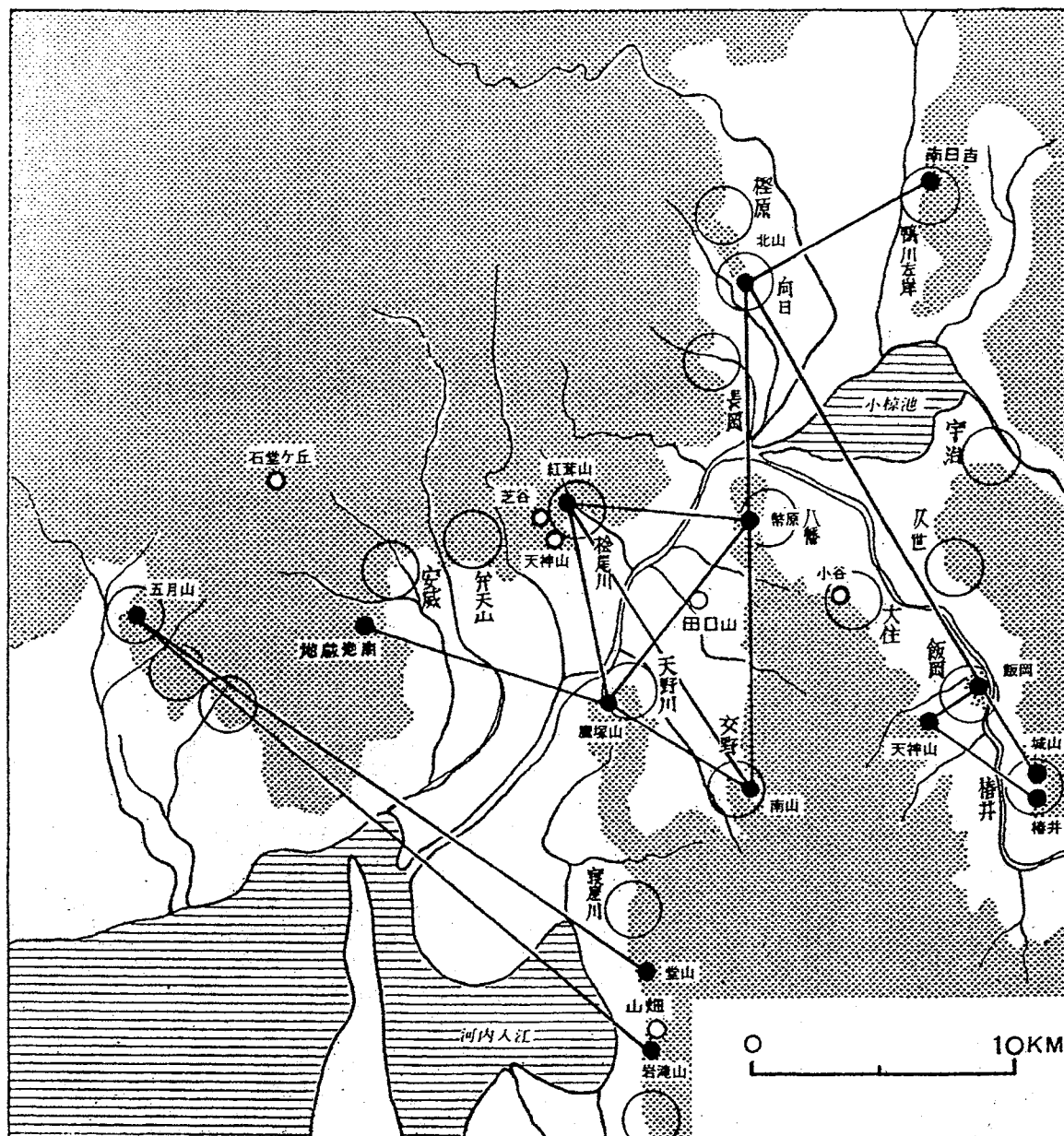
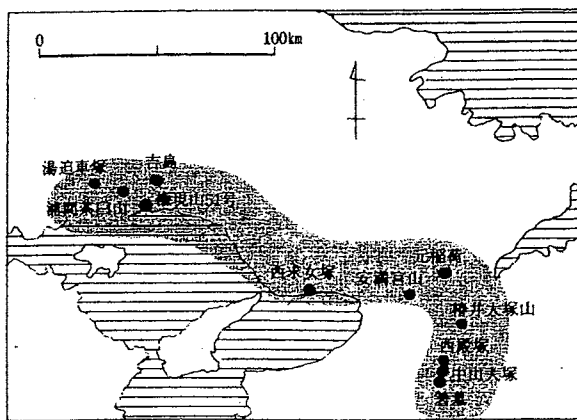
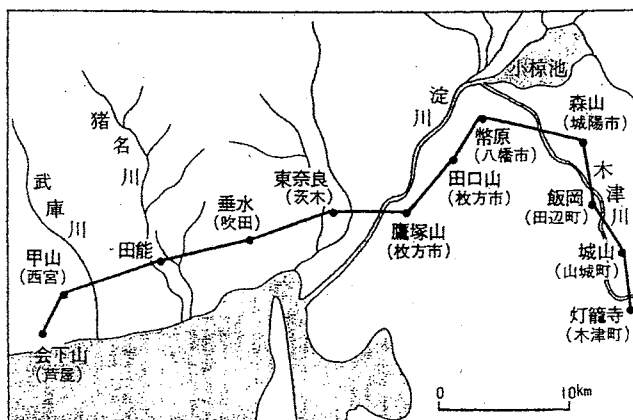


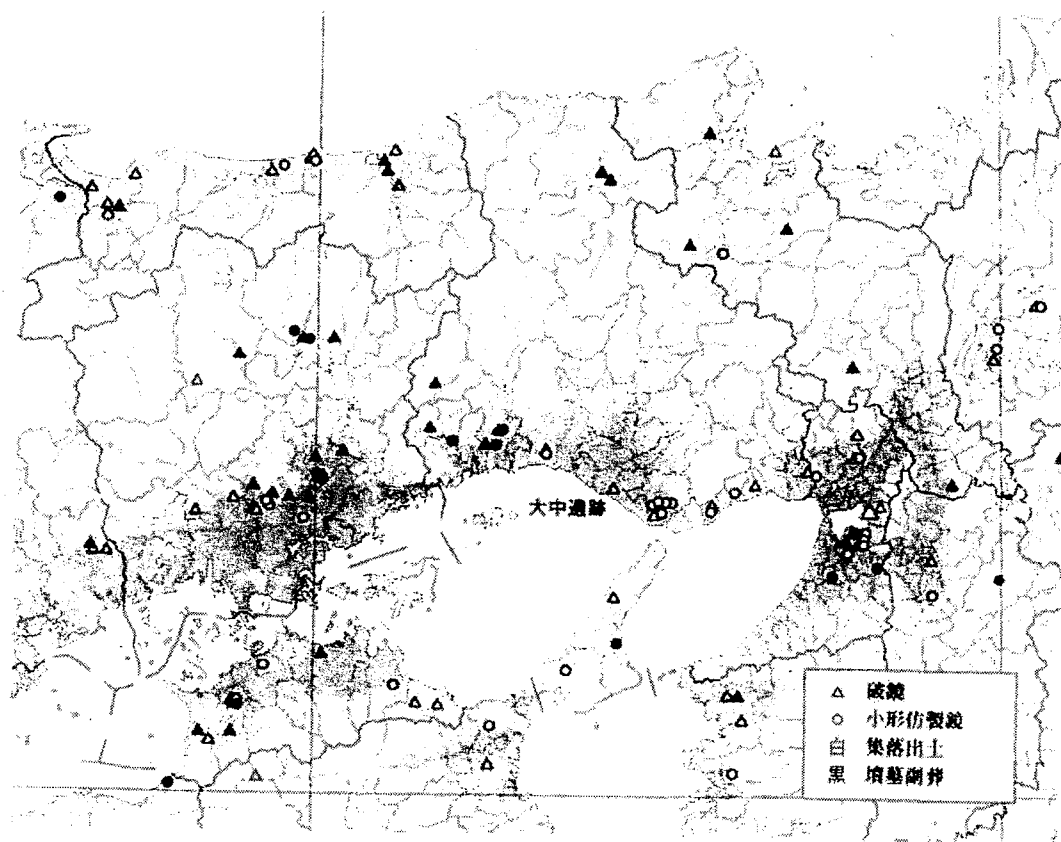
弥生中期から古墳前期における中部日本の年輪セルロース酸素同位体比の気候学的成分の周期ごとの変動
a. 元々のデータ, b. 64年以上, c. 8~64年, d. 8年以下. 各周期の変動は、実際の振幅に合わせて表示してある。

(中塚 2022)



用木山遺跡等遺構出土状況および地形図





【凡例】 銅鏡は縮尺1/2に統一
 (△は鏡の形不同) 各文献より転載

★ 生産想定時期

◎ 入手想定時期

× 廃棄時期

△ 埋置時期

□ 副葬時期

▽ 環境(存否のみ示す)

—— 保有期間 ——— 遺跡の存在期間を示す。

数値年代仮定数点.....▽a

漢鏡編年(同封分期参考)

土器小様式 (森岡 2006・2020)		IV-4	V-1	V-2	V-3	V-4	V-5	V-6
① カネ方谷遺跡 (阿波東部)	V			後期前半		後期後半		庄内武期直前
② 衣山遺跡 (播磨東部)	V							
③ 吾谷遺跡 (濃尾東部)	V							
④ 木津城山遺跡 A (山城南部)	V							
⑤ 木津城山遺跡 B (山城南部)	V							
⑥ 滝ヶ峯遺跡 (紀伊北部)	V							
⑦ 舟木遺跡 (淡路北部)	V							

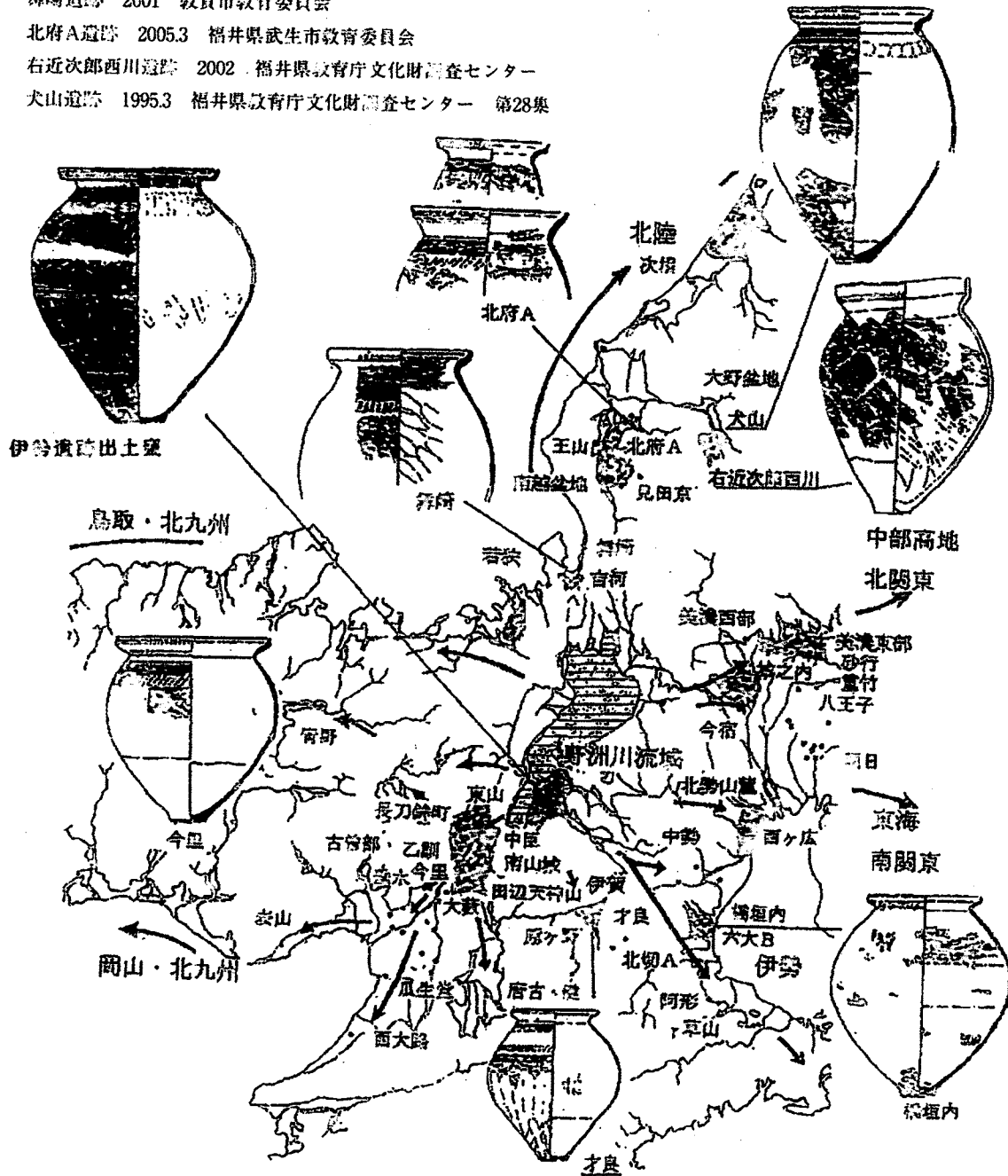
上段：弥生時代後期の中国鏡・小形仿製鏡の東伝状況分布図

(兵庫県立考古博物館 2022『弥生集落転生』より転載)

下段：弥生時代後期の早期入手を示唆する銅鏡と土器と集落の関係性(筆者作成)

弥生遺跡における中国鏡・小形仿製鏡の存在形態

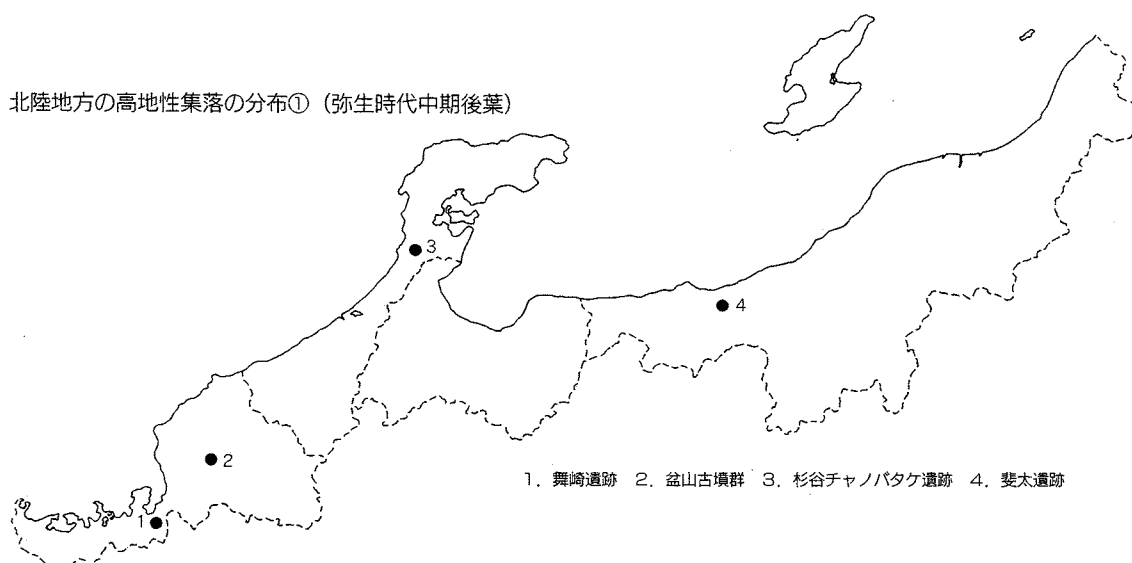
見田京遺跡発掘調査報告書 1988.3 福井県今立町教育委員会
 御崎遺跡 2001 敦賀市教育委員会
 北府A遺跡 2005.3 福井県武生市教育委員会
 右近次郎西川遺跡 2002 福井県教育庁文化財調査センター
 犬山遺跡 1995.3 福井県教育庁文化財調査センター 第28集



E山1号墓 朝日山 2002 朝日町文化財調査報告書第3集
 森岡秀人 山城地域 弥生土器の様式と年代 近畿Ⅱ 1990
 伊勢・伊賀地域 上村安生 美濃地域 菅田英博・高木宏和
 弥生土器の様式と年代 東海Ⅱ 2002 木耳社

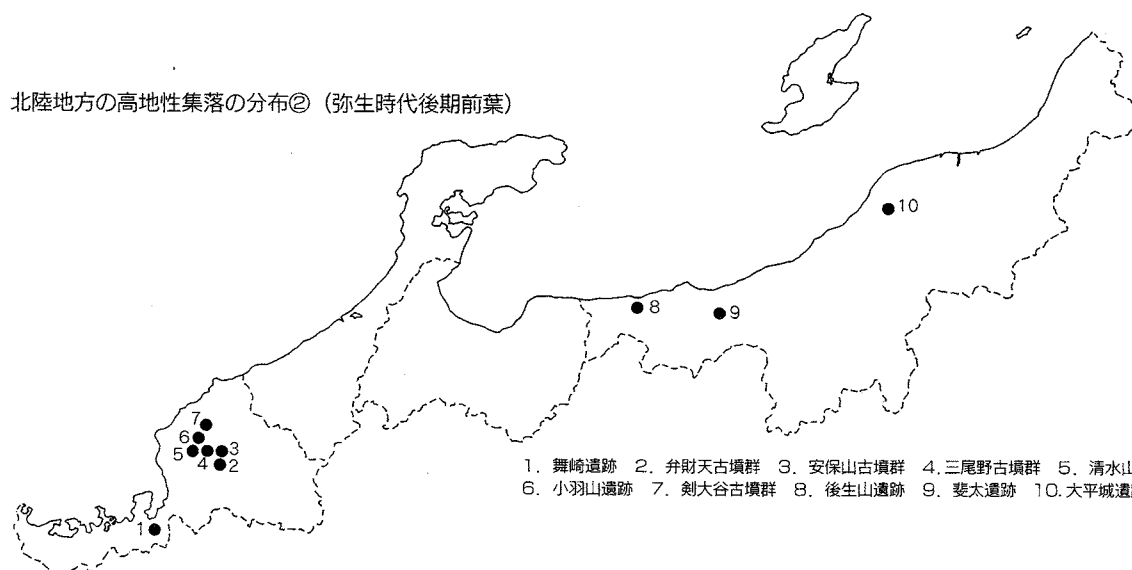
弥生時代後期における近江系土器の波及と在地化 (伴野編2012)

北陸地方の高地性集落の分布①（弥生時代中期後葉）



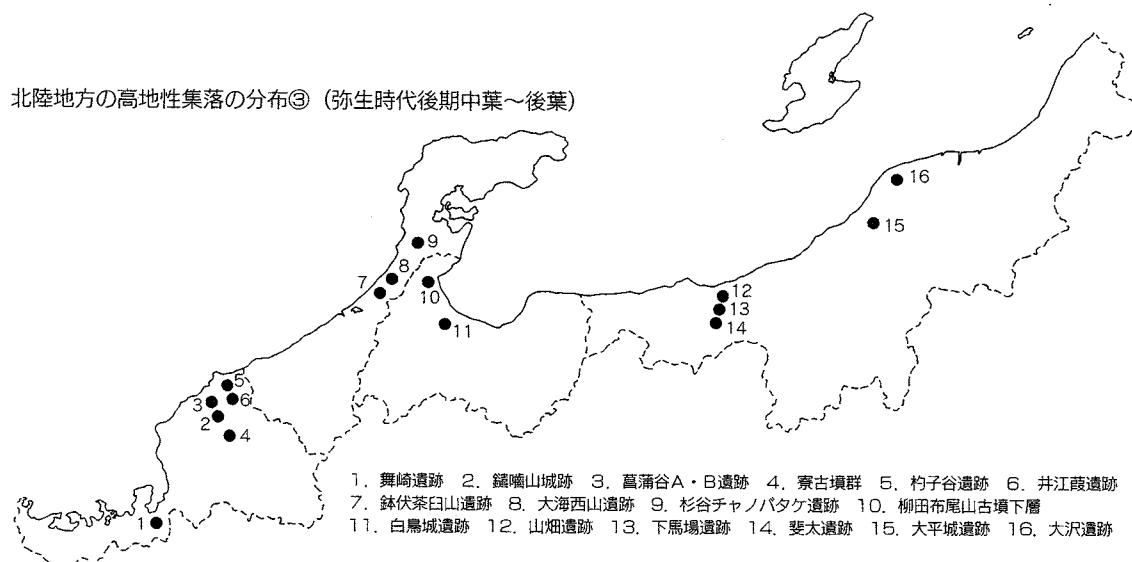
1. 舞崎遺跡 2. 盆山古墳群 3. 杉谷チャノバタケ遺跡 4. 斐太遺跡

北陸地方の高地性集落の分布②（弥生時代後期前葉）



1. 舞崎遺跡 2. 弁財天古墳群 3. 安保山古墳群 4. 三尾野古墳群 5. 清水山古墳群
6. 小羽山遺跡 7. 剣大谷古墳群 8. 後生山遺跡 9. 斐太遺跡 10. 大平城遺跡

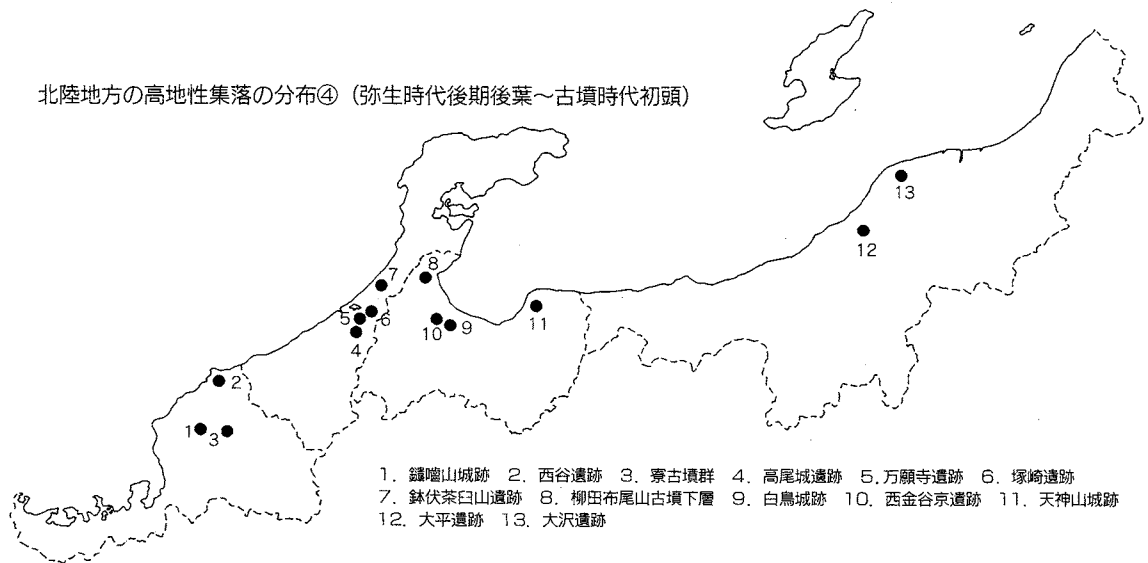
北陸地方の高地性集落の分布③（弥生時代後期中葉～後葉）



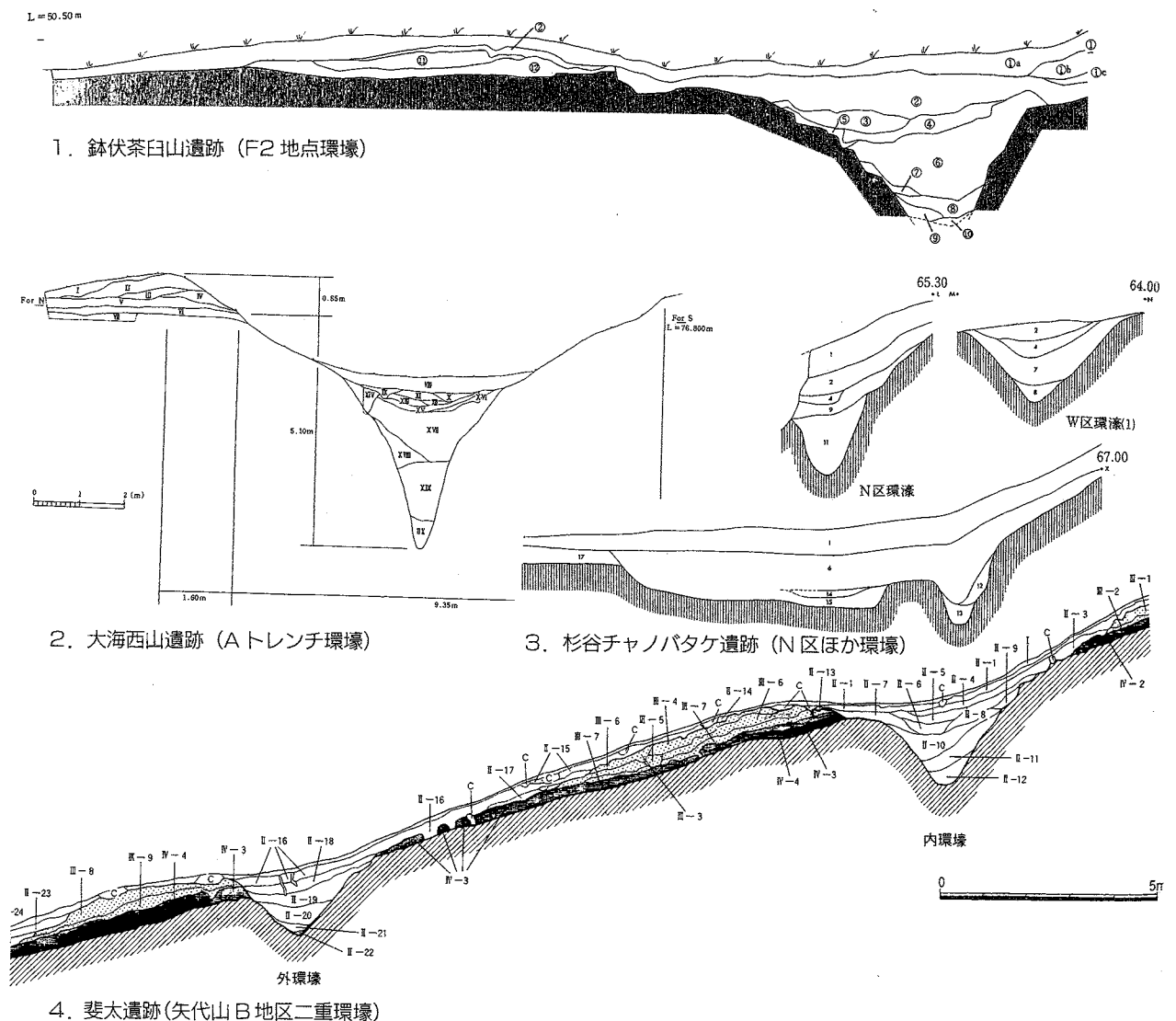
1. 舞崎遺跡 2. 鑓嶮山城跡 3. 菰蒲谷A・B遺跡 4. 寮古墳群 5. 杓子谷遺跡 6. 井江葭遺跡
7. 鉢伏茶臼山遺跡 8. 大海西山遺跡 9. 杉谷チャノバタケ遺跡 10. 柳田布尾山古墳下層
11. 白鳥城遺跡 12. 山畑遺跡 13. 下馬場遺跡 14. 斐太遺跡 15. 大平城遺跡 16. 大沢遺跡

北陸地方の高地性集落分布図①～③ ※堀 2009 年をもとに作図（一部修正）

北陸地方の高地性集落の分布④（弥生時代後期後葉～古墳時代初頭）



第131図 北陸地方の高地性集落分布図④



北陸地方の高地性集落環壕断面図 (S = 1/160)



日本史

A・Z・ブート

れる可能性がある。

国柄定史の調査結果「海上習俗」
遺跡（大塚和尙廟市、龍大寺市）
で出土した大型銅柱建物の柱材
は、近年の間断裏で、最も新しいも
のと古いものと700年以上も年
代差があった。時代が大きい雄株
木村を一つの建物に使った弥生
人の行動について、様々な説が提
示されている。

注目点

こころに注

山頂や海堤に築か
れた「高地性集落」は、
が強調されてきた。
の野田に交錯する海上
を見方から提示されい

盛んに通都された地
って、瀬戸内、近畿、
政量の理由を研
弥生時代の時に付

[illegible]

池上管橋構造で復元された大型堰
宮城県仙台市青葉区金馬田
宮城県仙台市青葉区金馬田
宮城県仙台市青葉区金馬田

10年が経てば老を憂ふ
 といふ憂の思はなほつゝ
 母を養ふの思はなほつゝ
 既に遠く京都府物産館の演習
 演説を練習す。△先生が
 のお話を聞かぬ所はない、
 どの時でも直せぬの思を
 を用ひてゐ、何本か演説の
 の外を別段に成り、年輩に
 代はらずといふ人達を説き
 れど△先生曰ふやうすべ
 り、無常の世中に理なきは
 大なる憂の思に現はれ、
 出し、導かんとて申はれた
 一一人の可能を説きつゝ
 幸甚哉と感謝を口ずかし
 所の養育を、何と申せば
 「おやうと感謝」といふた
 り、「やれやれと練習」の思
 本が直せばなほつゝ母を
 の思ひをなほつゝ、世間
 無常の憂の思をなほつゝ
 理想と練習とをなほつゝ、それ
 が出来たらなほつゝなほ
 といふ種々な^①
 練習をなほつゝ、吾生時代の
 現世の思はなほつゝ、今世の
 思はなほつゝ、また東京を
 遊びつゝ、また練習を
 になほつゝあるや、練習を
 して練習をなほつゝ、と申す
 いや、
 といふ^② (母を養ふ)

参考文献
森岡秀人、ア「明治性東洋」論のいまー半世紀ぶりの研究アプロジェクトの成果と課題」(シンポジウム「東洋研究」第240号『古代学研究所』、発行所「古代文化」第452号(古代学協会)本館蔵本)。

＊ 歴史学者が深まるにつれて日本史のトピックは目立ってきています。「日本史アップデート」では、研究成果を反映した最新版を、広く知られた歴史観と比較しながら紹介します。「世界史アップデート」と関連で掲載の予定です。

柱の年代 なぜ700年も違う

1999年に復元された池上曾根遺跡跡の大型掘立柱建物—大阪府和泉市



大阪・池上曾根遺跡 再計測で判明

弥生時代の「神殿」ともいわれる池上曾根遺跡（大阪府）の大型建物に謎が生まれた。複数の柱の年代を再計測すると、最大で700年以上も離れたバラバラな測定結果が出たのだ。「ひとつの建物なのに、こんな例は知らない」と研究者は首をかしげる。いったい、どういうこと？

紀元前700年代

紀元前52年

—いずれも大阪府和泉市の府立弥生文化博物館

あれから約30年。当時は不十分だった標準パターン（精度や信頼性が高まったこと）もあり、この手法の専門家、光谷拓実・奈良文化財研究所名誉研究員がこのほど、遺跡が立地する和泉市・泉大津市や国立歴史民俗博物館（千葉県）と協力して測り直した。その結果、前52年の柱は従来の値を遡認した一方で、残る4本の年代は前221年、前403年、前520年、前782年と散らばり、いずれも従来の考えられてきたよりはるかに古かった。新たに1本を加えて実施された、年輪に反

映される夏の降水量の違いで年代を求める酸素同位体比年輪年代でもほぼ一致した。ひとつの建物なのに、柱の古さに数百年ものばらつきが出るという「想定外」（光谷さん）の結果に、箱崎真隆・歴史学教授も「きわめて特殊だ」。理由として複数の解釈を提示する。

同遺跡の大型掘立柱建物跡（中期）が一躍有名になったのは1990年代のこと。柱の根本が腐らず残っていた18本のうち、5本について奈良国立文化財研究所（当時）が年輪年代法で古さを測定。1本が紀元前52年という値をはじき出し、これが建物の建築年代となった。あとの4本も

ほぼ同じころとされた。年輪年代測定は、年ごとに変化する樹木の年輪幅を測る方法で、「ものさし」となる標準パターンと比べながら建築材の伐採、あるいは枯死した年代を推定する。その数値は、土器の型式変化をもとに組み立てられてきた当時の編年に修正を迫るもので、学界に衝撃を与えた。

まず、転用材の可能性。大型建物より前に建てられた構造物で使われた古材を再利用した場合。ただ、古ければ古いほど朽ちたり劣化したりするはずで、数百年も耐えることは厳しい。

いずれの説明も決定打に欠ける現状ながら「埋没材利用の可能性など、これまで考えの及ばなかった問題提起だ」と大阪府立弥生文化博物館の稲垣田佳男館長。奈良県立橿原考古学研究所の森岡秀人共同研究員も「弥生人の土木開発や森林活用、利用樹木、供給源など多くの問題を突きつげられた」といい、さらなる研究の深化を促す。

箱崎さんは上記の遺跡が複合した可能性や、世界的に見られる巨木信仰など老木に精神的な意味を見いだす祭祀的な理由も視野に入れて検討したいという。

（調査員・中村俊介）

弥生時代の「神殿」ともいわれる池上曾根遺跡跡の大型掘立柱建物—大阪府和泉市